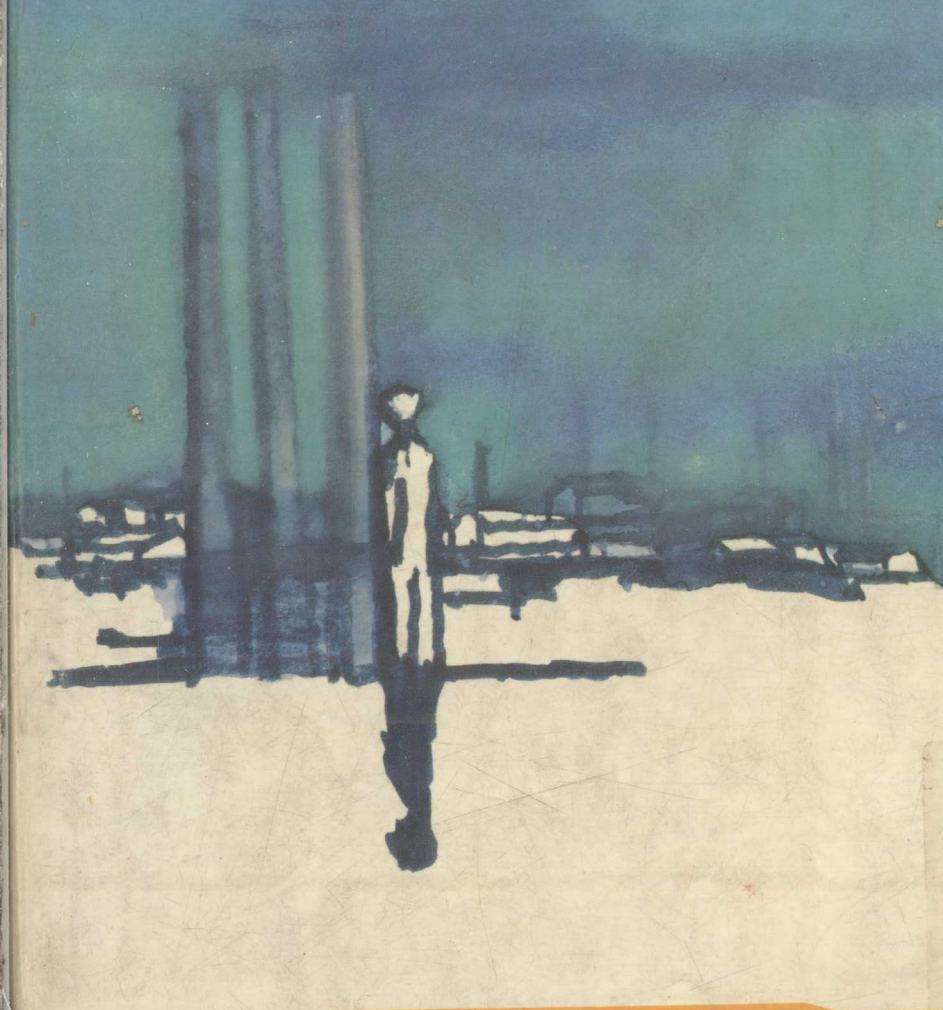


# わが街角 (一)

早乙女勝元



# わが街角

(一)

早乙女勝元

新潮社版



わが街角 まちかど

(一)

昭和四十八年十月五日印刷  
昭和四十八年十月十日発行

定価 六〇〇円

著者 早乙女勝元 さおとめかつもと

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七二  
郵便番号 一六二  
電話東京(26)二三番(大代)  
振替 東京八〇八番

(乱丁・落丁のものは、本社またはお買  
求めの書店にてお取替えいたします。)

わ  
が  
街  
角  
(一)



プロローグ





街角。  
まちかど。

ひとことといつてしまえば、それっきりのものかもしれないが、街角、まちかど……とつぶやきながら、その言葉の余韻をたしかめていくと、あの街角、この街角と、そのときどきの生活のにおいが、さまざま記憶をともなつて、勝平の胸の内からこみあげてくる。

子どもらしいあそびで、無我夢中にかげずりまわつた街角もあれば、あとからあとからふき出る涙をぬぐう力もなく、泣いて通つた街角もあるし、そうかと思えば、なにかすばらしくよいことがあつて、びよんびよんとおどりがつて、身体中ではずんで行つた街角もある。記憶の色あいは、人それぞれによつて、まちまちであろう。だが、その色彩が多ければ多いほど、年月という時間もまた、どっしりと重くつきかさねられていくのちがいない。

早瀬勝平の場合、街角のイメージは、かなり豊富である。

それは、勝平がいわゆる「町育ち」で、東京の東半、隅田川と荒川放水路とにはさまれたデルタ地帯に生れ育つて、屋根と屋根とがひしめきあつたすくさい路地裏から、ほとんど外に出ることがなかつたことがあげられよう。いや、自分から出なかつたのではない。出るゆとりがなかつたというのが、ほんとうなのだ。すべて貧しさのなせるわざである。

だが、街角とつぶやいて、勝平の記憶の底から、最初に髻ぼうかつと浮んでくるのは、煤すすけた家なみでもなければ、傾いた電柱の列でもない。人なみに小遣錢をもらえぬ悲哀でもない。きらりと光



って、神秘ののぞき窓のように、路地のあちこちで、かたく鋭く反射する水たまりなのだ。

その頃、といつても昭和十三、四年頃のことだが、東京の空は濃い紫で、したがって、雨上がりのあとの水たまりもまたあざやかなコバルト色、網膜にまでしみ通るほどに、さえさえとしていた。

いつも家にばかり閉じこもっていて、まるで老人のようにしなびた子どもだといわれ、"ジジイ小僧"の異名で知られる勝平は、雨が上がると同時に、ピインと、まるで豆鉄砲ではじかれたみたいに外へ出る。とうていじつとしちゃいられない。なにしろ、雨上がりの直後の水たまりは最高なのだ。時間がたてばたつほど、子どもたちが出てきて道は荒され、たちまち水はにごってしまふ。

町には、舗装された道は、まだ一カ所もなかった。

どこもかしこもどろんこ横丁だったから、雨上がりのあとには、大小無数の水たまりができた。そのひとつひとつが宝石とまではいかないけれど、きらりきらりと、凸レンズをちりばめたみたいに光るのは、なんとすばらしいことか。勝平は目を輝かせ、息をはずませて走る。荒川放水路の堤防にそって走る。

堤防の雑草は、ひさしぶりの露で生気をとりもどし、いつもはほこりっぽい土手が、いちめん水玉のじゅうたんをひろげたよう。土手も青く、空も青く、その境界線に、ゆらゆらとかけろろがにじんでいる。

「こっちな、あっちな」

勝平は、そんなことを口に出していいながら、足もとの水たまりをのぞきこんでは物色し、より大きな、清涼な水たまりをめざして走った。水たまりは、大きければ大きいほど都合よかった。

いまのところ、よりどりみどり、どれもみんな勝平のものなのだ。ただ手にとって、ひとりじめできないのが、実に残念である。

道には、まだ人影はない。

だが、土手下に這いつくばったトウモロコシ長屋のガラス窓が、あちらこちらでひらき、みな申しあわせたように、がらがらと音をたてはじめた。雨は上がった。日が出てきた。家も人も、さあさあ、うかうかしちゃいられないよ、といわんばかりである。

水たまりは、まるで一枚の鏡だった。地上のありとあらゆるものが、なんでも映っている。

縁日が出る稲荷いなりの横の、ちいさな原にできたそれは、とりわけピカ一にすばらしい。水は紺青、あたりはひっそり。稲荷のほころのわきで、石のキツネが二匹ならんですわっていたが、そのキツネに見られるのでさえも惜しいように、勝平には思えるのである。

できることなら、だれにもぞかれないように、そっと、幕でも張ってしまいたい。もっとも、そうしてしまったら、水面にはなんにもうつらないわけか。……

ふーん。

勝平は、鼻を鳴らした。久しく感じたことのない興奮が、ぞくぞくと背すじをつきぬけるようにして、小さな身体を包む。だれもないところ、秘密の場所と思えば、なおさらのこと、水たまりにうつるものすべてが、現実をこえた二次元の世界に、勝平をさそいこむのである。

まず電柱。電信線があった。それはまた、なんとややこしく空をくぎっているのだろう。電信線のあいだをかすめ飛ぶ小鳥。そして、トンボ。トンボは、こうしてみると、みなキの字を描いて飛んでいく。一列に、キ、キ、キ……とならんでいくこともある。そして、北へ、北へと飛ぶ。不思議であった。北の方角に、よっぽど、ステキなことでもあるのだろうか。

不思議といえは、雲もまた、その中に入ろう。小犬のかつこうをした雲は、これまた、赤トンボとおなじに、前のめりになつて北をめざして行く。行くけれども、みな、足の下を移動していくのだからおもしろい。ちょうど、その雲の上に乗つたような感覚なのだ。雲が動けば勝平も動く。

「オーイ」

と、勝平は呼んだ。

その声は、水面にはねかえつて、「オーイ」と、勝平の耳に飛びこんできた。

自分では、思いきつてせいっぱいの声を出したつもりなのに、われとわが耳にはねかえつてきたそのの、なんとかぼそく、貧弱なこと。だが、しかし、それでもよかった。ありとあらゆるものが、いっせいにオーイとこたえてくれたような気がするのである。では、もう一度。

「オマエハダレダ？」

その場にしゃがみこみ、自分と向いあつた顔にむかつて、勝平はいつてみた。すると、相手は口をとがらせて、少々おもはゆげにフフンと笑つた。

勝平は、おどろいて目を見張る。

それはもちろん、自分の顔にはちがいがいなかったが、いつも家の鏡で見るときのそれと、かなりちがうように見えるのは、どうしたわけか。勝平の顔は、鏡を見ても、われながらアイソのつきる容貌であつた。まず、でこんと突きでた額と、大きすぎる頭は、福助たけひ尼袋の商標を思わせた。そのカナヅチ頭につぶされて、二つの目は満足にひらかず、眠つたように半開き。顔の中心の目が、そんなぐあいであつたから、鼻も口もスッキリとはいかず、鈍重にゆがんで見えたものだったが、あれは、もしかすると家の鏡のせいか。鏡が台所の陰気な場所にあつて、それ自身、安物

で波状になっていたのではなかったのか。

しかしいま、正面に向いあつた勝平の顔は、瘤状こぶに突起したオデコはどうしようもないにしても、その下の目がちがう。ひらいた目に、少々の光がある。ひとさし指をほおにあて、イーッとやれば、相手もイーッとやりかえし、ヒョットコの顔をすれば、相手もしかえし、前歯をむきだしにして、隣家のどら猫さながらにうなったりもする。

「こいつめ！」

と、ひとさし指を突きだして、顔の中心をはじいたら、とたんに水面の顔は、怪物みたいにふくれあがつて、ぶよよーんと揺れて、見えなくなつてしまった。

足もとの一点から、ゆるやかに拡大した波紋は、たちまち水面の沈黙を荒し、それにつれて、勝平の視界も自然と散漫になつてしまつたが、このとき勝平は、思わず息をつめた。いままで気づかなかつたものが、水たまりのふちからぐいと頭をのぼして、その先端が、かすかな波紋にゆらいでいるのを見たのである。

おぼけ煙突であつた。

「やはっ！」

勝平の感激といつたらない。思わぬところで、なつかしいだれかにでも出会つたように、彼は無意識に立ちあがつて、前かがみの姿勢になつた。

おぼけ煙突といつても、煙突のぼけものではないのだ。黒ぐるとした人家の屋根を、はるかな下に、つらぬいて、信じがたい高さで宙空に突きささつた四本煙突のことである。この町のどこからでも見ることでできる大煙突は、当然ながら毎日、下町の隅ずみまでを、いや、もしかすると、東京中を昂然と見おろしているのかもしれない。

四本煙突は、しかし、見る場所と角度によって、四本がかさなって一本に見えたり、また二本、三本に見えることもあった。まるで、おばけみたいにつぎつぎと変貌する煙突だということ、いつのまにか「おばけ煙突」の俗称がついたのである。それは、しかし、もの心ついたときから、勝平の目の中にあつた。

まだ小学校へ上がる前、人一倍内気で、北風がびゅうと鳴る音もこわくてしかたなかつた勝平は、入学という緊張の日を前に、土手の上から夕焼けの空にのびる長身の煙突群にむかつて、「煙突やあい」

と、呼びかけたことがある。

おまえはいいな。大きくて、どっしりしていて、強そうで。ボクもおまえのようになりたいんだ。そうすれば、こわいものなんか、ひとつもないだろうに。……

しかし、その煙突の下に、一体なにがあるのだろうかという疑問は、やがて勝平の頭の中いっぱいにはひろがりだした。が、そんなことを口に出して人にきくだけの勇氣もない少年は、勝手気ままな空想をはたらかせて、あれは風呂屋かもしれないと思ったりした。町の銭湯には、かならず太くて長い煙突がつきものだったからだ。だが、それにしては、ずいぶんバカでかい銭湯があつたものである。四本の煙突をそなえた銭湯には、あるいは、プールほどの湯槽が用意されているのではないか。

やがて、母のことばから、日本一の長身の煙突群は、千住の火力発電所だということを知ったときのおどろき。期待が裏ざられて、がっかりしたもの、しかし、その四本煙突の下から、毎日、目に見えぬデンキが流れて、町中がピカピカに明るくなることを考えると、勝平は満足しないわけにいかなくつた。やはり、尊敬にあたいするおばけ煙突である。

いま、その四本煙突は、勝平の目の下にある。これだから、水たまりはこたえられない。もくもくと黒煙を吹きあげる大煙突のてっぺんに足をかけることもできるし、その上を歩くことだって、なにもかもし思いのまま自由にできるのである。

勝平のほおから、会心の笑いが吹きこぼれる。

「ようし！」

勝平はつぶやき、どろんこだらけのチビた下駄を放りだすと、素足のまま、そろりそろりと水たまりへ入った。できるだけ波紋が立たないように、細心の注意をはらいながら、勝平はぬき足さし足、水たまりの中ほどまで行ってみた。

四本煙突の先端が、とらえどころのない黒いカンテンみたいに、ふうわりふうわりと揺れている。それでも、その先っぽのところを足かけた。

ここで思わぬ邪魔が入らなければ、勝平は、おそらく夕方まで、水たまりであそんでいたことだろう。孤独な少年にとっては、雨上がりのたまり水も無二の親友なのだ。水たまりは口をきかないが、だれよりもたのもしく勝平の夢を受けとめ、かなえてくれるような気がするのである。

「オーイ」

勝平は、びくっとした。

ふりかえると、三、四人の子どもたちであった。稲荷のほこらの陰から、陽やけた顔のくりくり目が、いくつかならんで垣根の隙間にのぞいている。

「なにしてんだい、そんなところでサ」

「うらん」

勝平は、いやいやでもするように、水たまりの中心部で首をふった。なにしているときかれても、

ひとことではこたえられない。こたえられないが、そうきかれたことで、勝平は耳まで赤くなり、その表情はみにくくねじれた。

「サカナ、いるんかよう」

「……」

「カネ、おとしたんか？」

「……」

「あいつ、耳のアナ、ふさがってんのとちがうか。じゃなきや、アタマのネジ、おっぱずれてんだ」

下町っ子は口が悪い。いいたいほうだいのあくたれをついて、あげすけな笑い声を一時に吹きあげたが、そのとき勝平は、信じがたい動作で、横つとびに水たまりのふちへ飛んでいた。泥だらけの下駄を手にするが早いか、あとは一目散に空地を突っつきり、空地のはしの井戸端にいたかっぽう着姿のかみさんの袖の下をくぐりぬけて、さっと路地裏へ逃げこむ。かみさんは、よほどおどろいたにちがいない。満艦飾のおしめの下で、のけぞるような恰好で金切り声をはりあげた。「びっくらさせせんじやないよ。心臓が、ひっくりけるじやないかい！」

勝平は、へっと首をすくめた。

もう走る必要はない。両手にかたほうずつの下駄を持って、素足のまま、とほとほと歩いた。

せまい道は、どこもかしこもぬかるみだらけだった。が、どうせよごれた足には、よごれることでの心配はいらなかった。それでも慎重な勝平は、わざわざ土のかたそうな部分をえらんで歩く。一人っきりの秘密が、こっそり、だれかにのぞかれていたような不安で、勝平の胸は、トキトキとせわしない音をたてている。もしも見られていたとしたら、秘密が秘密でなくなってしまう

たのではないか。たとえば、雨上がりのあと、町中の子どもたちが、わっといっせいに水たまりへ殺到したら、どうなるだろう。どうなるかしれぬが、それは、彼らが土足で心の中に踏みこんでくる以上に、恐ろしく悲しいことなのである。

勝平は、頭の中がいっぱいになって、どこをどう歩いているのかもわからなかった。

チャキ、チャキ……という歯ぎれのいい音が、横丁にひびいた。あれは花売りの老人である。季節の花が今にも盛れこぼれそうなりヤカーをひいて、はだし足袋に、手甲キャハン姿で、大きなハサミを鳴らしながら、花屋でござい、エー、花屋でござい、と洪い銀色の声をひびかせてくる。すると、その老人の後につづいて、遠くかすかな歌声が、雨上がりの路地をつたわって流れしてきた。

我が大君に召されたる

生命いのちはえある朝ぼらけ

たたえておくる一億の

欲呼は高く天をつく

……………

勝平は足をとめた。

「出征兵士を送る歌」である。路地裏のどこかで、大人たちが歌っている。ほんとうは、なによりも勇壮なはずの歌声が、勝平の耳には、なぜか、ひどくもの悲しく、しみじみとした調子にきこえてくるのであった。



